「学制」に関する一考察

― 我国において技能尊重の風潮は醸成しうるか ―

我国の職業教育訓練について考える際に、まずもつて問題とされることは、「他の人々が大学に行くのなら、おれも大学に行かなければ」といつた極めて無目的的な学校教育万能の風潮であり又学校教育の中から、職業教育訓練の側面が大きく欠落している事実である。このような我国における特異な現象をその根源にまでつき進んで見定め、更に積極的に技能尊重の風潮を醸成していくためには、まず、我国学校教育の性格を明らかにしておく必要があると考える。しかして、本研究は、我国近代学校制度の基を築くことになつた明治5年の「学制」にまでさかのぼり、我国に学校教育万能の風潮をもたらした近代学校制度の性格を、内外の情勢及びその指導理念にまでつき進み究明しようとしたものである。我々は、この性格究明の中から、技能尊重の風潮を醸成していく上での必要な手がかりをつかむことができるように思われるのである。

（職業訓練にたずさわつておられ本論文を読まれる方々のために）

「人間の生活はその目的を追求しようとするところに展開する。教育の目標は、どこまでも自律的道徳的の人間を形成することにある」キエルシエンシユタイナー：「労作学校の概念」より

Ⅰ　技能労働者は何故不足するか：技能軽視の風潮

Ⅱ　技能軽視の風潮と他人指向的―地位指向的性格

Ⅲ　高次産業社会における他人指向的―地位指向的性格の形成

Ⅳ　我国における他人指向的―地位指向的性格形成の特殊性

(1)　外部規制的倫理観に支えられた伝統文化と他人指向的性格の形成

(2)　身分階級制―職業に対する貴賤意識の残存と地位指向的性格の形成

Ⅴ　外部規制的倫理観に支えられた伝統文化を否定するものとしての教育制度改革―「学制」の制定と6・3制の実施。

Ⅰ　技能労働者は何故不足するか

現在、我国工業社会の直面している最大の問題の一つとして、技能労働者の著しい不足ということがあげられる。しかし国土が狭小で、しかも天然資源に乏しく、人口密度が極めて高く、それ故にこそ、工業立国を強いられてきた我国において、何故に、このような現象が生ずることになつたのであろうか。様々な原因が考えられる。

すでに労働省においても明らかにされているように、

まず第1に、経済の高度成長に伴う著しい求人の増大ということが考えられる。

次いで第2に、供給労働力の大宗を占める新規学卒就職者が、戦後の出生率低下の傾向を反映し、昭和42年をピークとして減少する傾向が著しくなつてきていること。

第3に、一般的に年令の低いほど技能習得の効果が高いとされてきた技能訓練を必要とする職種に早くから就職しようとするものが、最近の急速な進学率の上昇により、著しく減少する傾向が認められる一方、進学先の学校においては、技能訓練をも含む職業教育訓練を重視する傾向は微弱であること等の理由が考えられる。

しかし、以上のような理由が、最終的なきめてとなりえないことは、いうまでもないことである。というのは、もし工業立国を標榜する我国において、多くの若者達が、技能職を高く評価し、きそつて技能職を選ぼうとするならば、たとえ上にかかげた理由が、かなり顕著なものとなつたとしても、さほど問題は、深刻にはなりえなかつたと考えられるからである。結局、より根源的な問題として、労働省も、正しくその原因を指摘しているように、我国に技能尊重の風潮が確立されておらず、一般に技能職が軽視され、技能労働者の社会的、経済的地位が、かならずしも、高くはないという事実にあるといわざるをえない。

しかし、何故に、工業立国を唱えてきた我国において、かかる技能軽視の風潮が生れ、技能尊重の気風が育たなかつたのであろうか。

Ⅱ　技能軽視の風潮と他人指向的一地位指向的性格について

この問題は、我々教育訓練にたずさわる者にとつて、特に見落すことの出来ない重大な問題であるといわざるをえない。というのは、この問題は、意識すると否とにかかわらず、若者達をはぐくみ育てている我国の教育文化のあり方と深いかかわりをもつものであるからである。まずもつて問題として感ぜられることは、無意図的教育訓練環境としての我国産業社会のうちにひそむ人間形成力、とりわけ、職業人形成の力の方向並びにその性格といつたものに大きな問題があるように思われることである。

それは、一言にしていうならば、現代産業社会が、知らず知らずのうちに、非常に多くの人々を他人指向的にし、(3) 地位指向的にしていることであり、このような現代産業社会のうちにひそむ人間形成力によつて、人々は、個々人の能力や適性又は興味といつたものに内的に動機づけられるよりは、はるかに強く社会的地位とか経済的なものによつて外的に動機づけられやすくなつており、確たる目標意識、役割意識といつたものを持たぬまま、たゞ漠然と「他の人々がサラリーマンを志望するから、おれもサラリーマンにでもなろうか」と思うようになり、又「他の人々が大学に行くから、おれも大学に行かなければ」と思うようになつてきていることにあるように思われる。かくして、誰れもかれもがサラリーマンになりたがり、ホワイトカラーにあこがれ、大学に行きたがるメンタル・クライメートが出来あがり、その結果として、ブルーカラーになろうとするものが少なくなり、技能職軽視の風潮ができあがり、技能職につこうとするものが、極度に不足するという由々

しい事態をひきおこすようになつたものと考えられる。

ところで、このような現代日本人のうちにみられる顕著な他人指向的であると共に、地位指向的な社会的性格は、どのようにして、形成されてきたものなのであろうか。この問題が正しくとらえられぬかぎり、我々は、技能労働者の不足という問題を、我々の問題、つまり、教育訓練にたずさわつているものにとつての問題としてとらえることは、とうてい不可能なことであり、従つて、我々の直面している問題を適切に解いていくことは、極めて困難となるように思われる。

このように、技能労働者の不足という事実と深いかかわりを持つと考えられる日本人の他人指向的一地位指向的社会的性格の形成とその特殊性について考察するにあたつて、二つの見方が可能となるように思われる。

その第1は、このような社会的性格の形成を、現代の高次産業社会に共通にみられる現象としてとらえる見かたであり、

その第2は、このような現象を日本独自のものとして、とらえようとするものである。これらは共に比較文化史的な方法によつて可能となる見かたであり、より具体的にいうならば、非常に工業化の進んだ社会、たとえば、現代アメリカ社会をとりあげ、それを我国工業社会と比較し、他人指向的一地位指向的社会的性格の発生について検討し、両者に共通点を認めるとき、それは、第1の見かたとなり、両者に相異点をみる時、それは第2の見かたとなるといえる。

Ⅲ　高次産業社会における他人指向的一地位指向的性格の形成

まず、第一の見かたにたつてみる時、日本は、アメリカと共に、高度に工業化された社会としてとらえられる。その第1の特色は、機械化が進み、マスコミがよく普及しており、更に高度に組織化され、重層化されたいわゆる情報産業社会であることであり、その第2の特色は、組織そのものが、絶えず、再組織、再統合されつつあり、ヨーロッパ社会等と比較し、より開かれた社会として、高い流動性をもつ社会であり、激しい競争が是認されている社会であることである。このように高度に組織化されていながら、極めて流動性の高い社会においては、人々が、絶えず動き流れている環境、つまり、組織の変化に適応していくことをせまられていることはいうまでもないことである。その意味において、人々は、１９世紀のアメリカ人等に多くみられた信念の人、つまり、リースマンのいう内部指向的性格の持主から、より柔軟な他人指向的性格の持主へと変つていかざるをえず一たん自分できめた指針には、どこまでも忠実につき従つていこうとするジャイロスコープ型の人間よりは、状況の変化に極めて敏感に反応しうるレーダー型の人間の方が、適応しやすい社会になつてきているといえるのである。

以上のような社会のしくみの変化及びその中で形成される社会的性格の変化に極めて大きな影響を及ぼすものとして、教育制度の性格が問題となつてくるのである。いうまでもなく、日本の教育制度も、アメリカの教育制度も共に全ての人々に対して公開され、全ての人々にすくなくも昇進と階級上昇の機会を与えるピラミッド型ラダー・システムを採用しており、それが、身分制階級制を

乗り越えて、能力による選別と移動を可能にする機構（selecting agency）として強い力を発揮しはじめていることは周く知られているところである。しかして、このような機能をもつ教育制度そのものものが、実は皮肉にも人々をより一層状況的にするとともに、他人指向的にし、地位指向的にしていると考えられるのである。(4) つまり、高度に組織化されながら、高い流動性をもつ高次産業社会で、その中に、教育制度を中核とする能力による選別機構が仕組まれている社会においては、人々は、すくなからず、他人指向的になり、地位指向的にならざるをえない、一般的な傾向性をもつものと考えられるのである。もち論このような高次産業社会の発達及びその中で形成される他人指向的で地位指向的な性格と我々が現に直面している技能労働者の不足ということとは、直接的に結びつくものではなく、人々が、他人指向的になり、地位指向的になつたとしても、その社会において、技能職の社会的地位が相対的に高く、更に、その技能職内におけるプレスティージ・ピラミッドが確立されておれば、現在我々が直面しているような極度の技能労働者の不足といつた現象は生じてこなかつたものと考えられるのである。

Ⅳ　我国における他人指向的―地位指向的性格の特殊性

ここまで考えてくると、我々は、日本人のうちにひそむ、他人指向的で地位指向的な性格なるものが、実は、最近になつてアメリカ人のうちにも認められつつある似たような性格とは、かなり異つた性格のものであることに気づかざるをえなくなつてくるのである。しかして、この時点から、我々は、さきにのべた第2の見かたの重要性を認めざるをえなくなつてくるのである。つまり、現代の日本人が現代のアメリカ人以上に状況的で、他人指向的で、地位指向的であることは広く知られているところであるが、日本人のこのような社会的性格は、アメリカにおける場合とは、全く異つた文化的脈絡の中から形成されてきたものであるということができるのである。

まず第1に気づく点は、アメリカ人の社会的性格が、リースマンも指摘しているように、社会の歴史的発達段階に応じて、伝統指向型(5)から内部指向型(6)へ、内部指向型から他人指向型へと変化してきたといわれているが、これに対して日本の場合には、伝統指向型から内部指向型の段階を経過することなしに、一足とびに他人指向型に移行してきているように思われることである。しかしてこのような違いの発生した原因は、なんといつても、伝統文化の性格の相異に由来するものであるように考えられる。つまり、現代アメリカ文化が、より内部規制的倫理観（より具体的には、プロテスタンデイズム的倫理観に代表される罪の意識）に支えられた伝統文化の上に、それを否定する形において形成されてきたものであるといえるのに対して、日本の現代文化は、外部規制的倫理観（より具体的には、儒教倫理の根底となつていたと思われる恥の意識）に支えられた伝統文化を出発点として、それを否定していくプロセスのうちにおのずと築かれてきたものであるということができる。

内部規制的倫理観に立つプロテスタンテイズムの倫理は、マツクス・ウエバーも指摘しているように、それまでは賤業視されていた商工業者に天職観又は天職意識を与え、それが、世俗内禁欲主

義の核となり資本主義を支える精神となると共に、それが変形された形においてではあるが、１９世紀のアメリカ人の内部指向的性格形成の最も有力なる力となつたと考えられるのに対して、[7]士農工商的身分階級制を前提とする外部規制的倫理観に立つ儒教倫理は、単にプロテスタンテイズムの倫理が、商工業者に対して与えることのできたもの、つまり、天職観とか天職意識といつたものを与えることができなかつたばかりではなく、その伝統的価値観が否定されていく、そのプロセスにおいて、見落すべからざる二つの重大な結果を残していつたものと考えられるのである。

(1) 外部規制的倫理観に支えられた伝統文化と他人指向的性格の形成

まずその第１は、我国における伝統文化が、身分階級制を前提とする外部規制的倫理観であつたがために、士農工商の制度そのものが否定されるや、急速にくずれ去り、それは、１９世紀のアメリカにおいて認められたような内部指向的な社会性格形成の契機ともなりえぬまま、日本人の社会的性格を、伝統指向型から、内部指向型の段階をとばして、一挙に他人指向型へと変えて行き、日本人をすぐれて状況的にし、ムードに弱い社会的性格の持主としていつたものと考えられるのである。つまり、日本人は文化史的にみて、現代日本人の性格形成の途上において、彼等を内的に動機づける契機をほとんど持ちえなかつたことに改めて気づかざるを得ないのである。このようにみてくることによつて、はじめて、我々日本人が、アメリカの教育訓練専門家達が教育訓練の目標を設定するにあたつて、いつも社会的なニーツとともに、被訓練者個々人のニーツを重んじ、彼等を外的に動機づけようとするばかりではなく、内的な動機づけを重視し、内外の動機の均衡をはかつて目標を設定しようとする基本的な考え方及び態度を、[8]なんとなく頭の中では理解しえても、それを実際に実施しようとする場合には、非常に大きな抵抗を感ずる原因を見出しうるように思われるのである。

つまり、我国には、さかのぼつていけば、天職観にまでゆきつくような、個々人の適性能力といつたものを、職業観とか職業的興味とのかかわりにおいて重視していくような考え方や態度は、確立されてはいなかつたし、又そのような態度を前提として、はじめて可能となる個々人の外的な動機と内的な動機の均衡の上に、個々人の目標意識を見定めて行き、そのような目標意識を支えとして、自己の社会における役割を自覚し、その自覚の上に、職業意識とか職業観といつたものをはぐくみ育てていくといつた考え方は、極めて定着しにくいものであつたことがわかるのである。すなわち、一方が内部規制的伝統文化を基盤とし、他方が、外部規制的伝統文化をその母体としていたことにより、前者においては、個々人が内外の動機の均衡をはかることにより目標意識を育てうる契機を持ちえたのに対し、後者においては、そのような契機を持ちえず、人々は、より一層状況的になるとともに、他人指向的にならざるをえず、自己の進路をきめるにあたつても、自己の適性とか能力といつたものを考えるきつかけをつかみえぬまゝ、「他の人々がサラリーマンを志望するから、おれもサラリーマンになろう」と思い、「他の人々が大学に行くから、おれも大学に行こうと思う」ようになり、極めてムードに弱い社会的性格を持つようになつていつたものと考えられるのである。

(2) 身分階級制—職業に対する貴賤観—の残存と地位指向的性格の形成

次いで、我国の伝統文化が、身分階級制を前提とする外部規制的倫理観に支えられたものであつたことから生じたと考えられる第2の結果についてみてゆきたいと思う。それは、我国の伝統的倫理観が、単に外部規制的なものであつたばかりではなく、それが特に身分階級制に応ずるものであつたがために生じたものであると考えられる。つまり、我国の伝統的な価値観が、身分階級制を前提とするものであつたがために、身分階級制のもつ制度的拘束力が取り除かれて後もなお、士農工商の制度の根底となつていた職業に対する貴賤意識は取り除かれることなく、そのまま残されることになり、職業に対する貴賤意識を克服する契機をそのうちにはらんでいたプロテスタンティズムに代表される内的拘束力つまり内部規制的倫理観に支えられた伝統文化を母体として発達した社会と較べ、はるかに強い地位指向的な性格が形成されることになつたものと考えられるのである。勿論、身分階級制のもつ制度的外的拘束力が解かれた時、すべての人々が、文字通り武士そのものにあこがれ、武士になりたかつたわけではないことは、今更いうまでもないことである。というのは、その時には、すでに、武士の身分そのものが廃止されてしまつていたからである。しかし、我国においては、第二次世界大戦が終るまでいかに多くの人々が軍人にあこがれ、役人、官僚になりたがつたことか。さらに重要なことは、この伝統的な武士の意識と態度こそが、士族意識として形をかえながら、殖産興業＝富国強兵の実践者としての実業家、つまり、岩崎や、中上川その他の士族商人の間にまで伝播してゆき、日本資本主義発達の離陸期において、欧米におけるプロテスタンティズムの倫理が果したと同じ役割を果すこととなり、日本における世俗内禁欲主義の核となり、日本の資本主義を支える一つの精神となつていつたと考えられることである。(9) ところで、明治以後士族意識として、あらゆる階層にその意識と態度を浸透させることになつた江戸末期までの武士の社会的性格とは、いかなるものであつたのだろうか。一言にしていうならば、それは、プロテスタンティズムを自らの倫理の中核としてとり入れていつた欧米の中産階級＝商工業者とは異り、産らしい産をもたぬ武官官僚群であり、組織人達であつたといえるのである。しかも、その多くが、戦うという本来の目標を失ない、秩序の維持にのみその精力の大半を費やしていた組織人達であつたことを考えると、(10) 現在、何故に、かくも多数の人々が、サラリーマン・ホワイトカラーにあこがれるのか合点がいくように思われるのである。彼等も又産らしい産をもたぬ組織人であり、会社や官庁等の組織の中でその組織のもつ秩序の維持によつてのみ身の安定を守ることの出来る人々であるからである。又同時に、このようなホワイトカラーへの異常なまでのあこがれの中にこそ、伝統的な身分意識が、屈折した形で、職業に対する貴賤意識となつてあらわれてきていることを認めざるをえないのである。しかして、職業に対する貴賤意識と、組織人としての上下の意識とが重なりあつて、日本人の地位指向性は、極めて、顕著なものとなりユニークなものとなつてきたことがわかるのである。

しかして、かせぐにおいつく貧乏なしといつた半ば盲目的とまでいえる農民の勤労精神と、貧しさ故に、ゆがめられてはいたものの自らの技能に対するほこりの故に富と権力とに抵抗しえた職人

気質といつた、直接生産にたずさわる人々の意識や倫理観は、急速に欠落してゆき、賤しい職業についているという意識からくる卑屈感と、蓄財によるおごり、それに遊びによる抵抗といつたものを核とする商人の倫理及び気質といつたものが、うだつのあがらぬ一般の現代サラリーマンつまり組織人達の間にまで屈折し変質した形において瀰漫しつつあるように思われるのである。

以上、我国とアメリカという二つの高度に組織化され、しかも流動性の高い国において、同じように発達しつつある他人指向的で地位指向的な性格が、その伝統文化の違いによつて、実は、かなりその性格を異にするものであることについて指摘し、これを職業観の形成からみる時、極めて多くの問題を含むものであり、特に、これを技能労働者の不足という問題とのかかわりにおいてみる時、問題はより深刻なものとなる文化的遠因についてみてきた。しかし、このような我国における固有の他人指向的で地位指向的な性格はすでにこれまでくりかえし述べてきたところからも明らかなように、単に、我国の伝統文化の性格、つまりその外部規制的で、身分階級制を前提とする性格によつてのみ方向づけられてきたものではなく、いま一つの重要な要因が加わることによつてはじめて形成されてきたものなのである。

V　外部規制的倫理観に支えられた伝統文化を否定するものとしての教育制度の改革—「学制」の制定と6.3制の実施

いま一つの重要な要因、それは、いうまでもなく、我国の身分階級制を前提とする外部規制的な伝統的価値観そのものを否定してきた力であり、我国の他人指向的で地位指向的な性格は、この力によつても大いに方向づけられてきたといえるのである。ところで、この我国の伝統的な価値観を否定して行つた力とは、具体的にいつて、一体何であつたのだろうか。それは、それまで、閉ざされていた社会を開いた力であり、才二次世界大戦後叫ばれた平等主義の原則であり、機会均等の精神であると共に、明治初期の四民平等の精神でもあつたといえるのである。そして、これらの精神の具現化されたものとして、昭和２２年の教育制度の大改革、つまり、６・３制の実施と、その大改革を可能にした遠因とも考えられる明治５年の「学制」の制定とをあげることができる。この二つの教育制度の大改革に認められる共通した点として、まず才１に共にピラミッド型ラダー・システムの採用を強調していることであり、そのことにより、前者においては、教育の機会が、階級制によつて、不平等なものとなつていたことを是正しようとしていたのに対し、後者においては、身分制度そのものに挑戦し、これを否定しようとしたものであり、共に教育の機会を拡大しようとしたものであつたことがあげられる。次いで、これら二つの教育改革の根底を貫ぬいて流れる教育思想が、共に、アングロ・アメリカンに固有の個人主義的実学主義的教育思想であつたことがあげられる。

とすると、我々の問題は、黒船の衝撃を受けていらいの問題であり、教育制度をはじめとして、能力によるたての社会移動を可能にする機構が大規模に採用されるようになつて以後の問題であることがわかるのである。つまり身分階級制を前提とする伝統文化が、欧米の合理主義思想、とりわけ、ジエフアソンのいういわゆる自然の貴族制なる考え方と共通の考え方の導入により[13]、否定されていくそのプロセスにおいて徐々に作り出され、更に、戦後の教育改革によつてにわかに拡大され

顕在化した問題であるといえるのである。しかも伝統文化の相異と富の蓄積度の相異から、個人主義的実学主義的思想は、定着することなく、欠落してゆき、能力によるたての移動の可能性のみが、学歴による移動という歪みをもって、強調されることとなり、学問による立身出世、つまり学歴万能のイメージを作りあげ、そのイメージこそが、これまでもくりかえし述べてきた現代日本人に固有のあらたなる社会的性格を作りだす大きな原因となったものと考えられるのである。

本論文“「学制」に関する一考察”は、以上のような問題を、明治5年の「学制」の制定にのみ焦点をしぼって論じたものであり、我国教育制度の持つ問題点をその根源にまでさかのぼり、更に制度が、制度制定の意図をはなれて持つようになった人間形成力の性格といった問題にまでたち入って明らかにしようとしたものである。従って、本論文は、教育制度全般にわたる問題を取扱ったものであり、職業訓練の問題のみを正面きってとりあげたものではない。しかし、我々が現在たずさわっている職業訓練の問題は、日本の教育制度全体、とりわけ、学校制度のもつ問題と深いかかわりをもつものであることは、いまさら、いうまでもないことである。というのは、職業訓練は学校制度がなすべくしてなしえなかった分野において急速に発達しつつあるとみることもできるものであり、その意味で、それは学校教育の批判者として、学校教育が解決しえなかった問題に挑むものであるともいえるからである。とすれば、我々は我国の学校制度のもつ基本的な問題をみきわめることなくして、我々の問題、つまり、職業訓練の問題を解決することはできないし、又今後の職業訓練のあるべき方向を見定めることも出来ないように思われるのである。その意味で、本論文が職業訓練に従事する人々にも読んでいただけることを幸に思うものである。

以上のような「学制」以降の我国における学校教育のもつ基本的問題の理解を深めることによってのみ、我々は、我々の従事している職業訓練を、学校教育がすでにおちこんでしまっている轍にくりかえしはまりこむことなしに、おし進めてゆける手がかりをつかむことが出来るように思われるのである。しかして、開かれた社会のもつよさ（つまり、能力や適性による社会移動を認めるよさ、これは我国においては、いわゆる学歴偏重といった言葉に表わされているように[14]、ひどくゆがめられており、様々な問題が残されてはいるものの、すべての人々に一応公開された教育制度を準備していることにより、ある程度まで保証されていることは確かなことである）や他人指向的社会的性格の持つとりえ（つまり、急速な変化に対しても極めて高い柔軟性を持ちうること）等の現在我々の持っているいくつかの有利な点を失うことなく、学校教育が行うべくして行ないえなかった職業訓練を充実していくことにより、我々は我国教育制度のもつ全般的なゆがみを是正し、ひいては学校教育空洞化の現象をも阻止することができるように思われるのである。

そして、そのためにも、知育中心のプレステイージ・ピラミッドを構成しているこれまでの学校制度と相並ぶ、高さにおいて、それと同等ないしは、それ以上のいま一つのプレステイージ・ピラミッド、つまり技能訓練中心の職業訓練体制の確立が望まれるのである。いうまでもなく、これら二つのプレステイージ・ピラミッドの間には相互交流が可能でなければならず、人々は、この頂点を異にして互いに重なりあう二つのプレステイージ・ピラミッドが各段階において交差しあう、そ

の交点において、共に開かれたどのコースを選んでいくかにかんして意志決定をせまられ、その意志決定の機会が与えられるたびごとに、彼等の主体性を回復し、自律心をはぐくみ育てていくチャンスを与えられることになるのである。

このような職業訓練制の整備拡充は、すでに我々日本人の社会的性格が他人指向的なものになってしまっていることを考える時、予想以上に重要なことのように考えられるのである。というのは、いったん、他人指向的になり相対的になってしまっている人間が、その柔軟さを失なわずに、自律性を身につけていくのには、制度そのものが、よほどきめ細かく、注意深く整えられている必要があるように思われるからである。ところで、この二つの異った頂点をもつプレステイージ・ピラミッドが統合され、融合された形で確立される新らしい教育訓練体制の生みだす人間像は、まさにレーダー型の自律的人間とでもいうべき人間であり、これまで理想的人間として描き出されがちなジャイロスコープ型の自律的人間とは、対照的な性格を持つ、全く新しい型の人間であるといえる。彼等は、これまでの人間より、はるかに外的状況の変化に対して敏感であり、急速な変化に対してもより巾広く適応して行ける人間となるわけである。

このような柔軟な社会的性格の持主を生み出すことになる、知育中心のプレステイージ・ピラミッドとも深いかかわりを持ちつつ、独自の体制をもつ極めて弾力性に富んだ技能のプレステイージ・ピラミッド、つまり、職業教育訓練の体制が、これまで、我国の教育の機能を一手に引き受け、まさに教育の独占体制を築きあげてきたかにみえる学校教育に、あえて挑戦するものとして、確立される時、おのずと我国にも技能尊重の気運が醸成されるものと考えられるのである。

ところで、これまで述べてきたところからも明らかなように、我国においては、職業教育訓練体制の確立と技能尊重の風潮を醸成することとの間には、一つの循環した関係が成り立つように思われるのであるが、ここで我々にとっての最大の問題点は、この二つの間に積極的な循環関係をうち立てていけるかどうかということにあるように思われる。更にここで問題となる事は、我々日本人の社会的性格であるが、その一つとしてあげることのできる他人指向的でムードに弱く又変化に対して敏感な性格は、さきにみてきたように、単に不利な条件としてのみ働くものではなく、状況の変化いかんによっては、そのまま極めて有利な条件ともなりうるものであることに気づくのである。とすると、結局、問題は、これまでも論じてきたいま一つの日本人の社会的性格であるホワイト・カラーに斜傾してきた地位指向的な性格をどの程度まで変容しうるかということにあるように思われる。

PR 活動の重要なことは、いまさらいうまでもないことである。しかし、我々の問題は、その問題を解決するために必要ないくつかの条件がそろっていなければ、いかなる活動も空しいものになりかねない。そこで最後に我々の活動にとって有利と考えられるいくつかの条件を列挙して、この稿を終えることにする。

まず第一にあげなければならないことは、技能労働者が極度に不足しているという事実そのものであり、それ故にこそ、稀少化しつつある技能労働者の価値が改めて問いなおされようとして

いることである。

第二に、後期中等教育及び高等教育の急速な普及により、単なる一般普通教育中心の学歴主義はまさに、虚像にすぎないものとなり、又、その一般普通教育を基礎とするホワイト・カラー候補者の供給過剰により、ホワイト・カラーへの夢が色あせたものとなりつつあること。

第三に、我国庶民の間には、古くから、現世の幸福を願い、商売繁盛や富貴栄達を祈願する顕著な傾向が見受けられ、[15] それは、「学制」制定当時においても、その後の教育改革においても、常に認められた傾向であったこと。しかし、財政的基盤がいかにも薄弱であったため、そのような願いが、充分に達成されず、安上がりな受験教育にそのエネルギーが費されてきてしまったこと。しかし今やめざましい経済成長が、金のかかる職業教育訓練をも可能にしつつあるように見受けられること、等をあげることができる。

(注)

(1) キエルシュタイナーは、ペスタロッチーの流れを汲むドイツの教育学者で、ものを作るという行為のうちにひそむ偉大なる人間形成力に目をつけ、1912年、有名な「労作学校の概念」"Begriff der Arbeitsschule"をものして、ひろくその名を知られるようになった。

(2) 労働省職業訓練局：職業訓練制度上の問題点、昭和42年6月及び
労働省職業訓練局：今後の職業訓練制度の考え方について、昭和42年6月、参照

(3) 他人指向的社会的性格というのは、リースマンの発見した社会的性格であり、伝統指向的社会的性格及び内部指向的社会的性格に対比して明らかにされた高度に工業化され組織化した現代アメリカにおいてあらたに形成されつつある性格で、「めざす目標が同時代人のみちびくままにかわり、かれの生涯をつうじて変らないのは、こうした努力のプロセスそのものと、他者からの信号にたえず細心の注意を払うというプロセスである」とされている。リースマン、加藤秀俊訳孤独な群集、みすず書房、1961年、p17参照

(4) Aaron V, Cicourel And John & Kitsuse：The Educational Decision－Makers, The Bobbs－Merrill Company Jnc.，1963は、この間の事情を知るのに助けとなる文献である。

(5) すでにふれてきたように、内部指向的社会的性格、他人指向的社会的性格に対比される社会的性格であり、比較的変動のない社会秩序のなかにおいて、特定の年令集団、民族、カーストなどの固定した集団の一員として同調していき、「過去何世紀にもわたってせいぜいほんの少ししか修正をうけずにつづいてきた行動様式を理解し、それに満足することを学びと

る」ような性格で又個人の活動が、伝統に対して服従するという方向をとる性格、リースマン：op. cit., p. 9.

(6) 社会成員の増大、資本の急速な蓄積、さらに絶えざる拡大を続ける社会において、選択の巾がひろがるにつれ、伝統指向にたよらずに生きてゆける性格であり、「個人の方向づけの起動力になるものが内的」で「幼少年期に年長者によってその起動力がうえつけられ、そのむけられる目標は、一般化された目標であり、かつ同時に、宿命的にのがれることのできない目標である」とされている。Ibid.,p.12

(7) M. ウエーバー、梶山、大塚訳：プロテスタンテイズムの倫理と資本主義の精神、上、下、岩波書店、1965～1966 参照

(8) たとえば、D. H. フライヤー、M, R, フェインバーグS. S. ザルキンド、鶴巻敏夫、弓隆明共訳：新しい教育訓練の在り方、ダイアモンド社 1964、pp. 287-288 にその代表的考え方をうかがうことができる。

(9) 福地重孝：士族と士族意識、近代日本を興せるもの亡ぼすもの、春秋社、1967 参照

(10) 戦う目標を失った武士達の生活がいかなるものであったかについては、加賀樹芝朗：元祿下級武士の生活、雄山閣 1966 参照。いかに現代サラリーマンの生活と似ていたかがわかる。

(11) 原料の供給面、製品の販売、流通の面において、職人達は商人に依存せざるを得なくなり、四民のうちでもまっさきに商に屈服しなければならなかった。しかして庶民の芸術のうちでも、「職人たちはせいぜい落語、軽口のテーマとなるより仕方がなかった」といわれ彼等の抵抗は間抜けな笑いの対象とされがちであったのである。吉田光邦：日本の職人、角川新書、1962 p 151.

(12) 石田一良：町人文化、至文堂、1966 参照

(13) 「富と出生にもとづき、徳と才能のいずれをも欠いた人為の貴族制」に対するもので、富と出生という人為的条件をとり去った上で、自然が人間に与えた賜物である徳と才能とによる支配体制をジェファソンは自然の貴族制と呼んでいた。しかして、このような支配体制を実現するために、彼は限嗣相続制 (entails) と長子相続の特権 (privilege of primogeniture) の廃止を唱えるとともに、税金による無償の公立学校制度の確立の提案を行ったのである。

（本論文参照のこと）

(14) 社会における地位が出生とか経済力よりも学歴によって左右されるということは、ある意味において能力適性を重んずる社会となってきていることを意味するが、我国においては、それが、終身雇用制とか年功制と結びついて、学歴という一種の achievement が、とかく就職と同時に身分化し、ascription となってしまうところに問題があると共に、奨学金制度等の不備のため、能力が親の経済力をはなれ、社会的に育成されるところまでいっていないところに問題が残されているといえる。

(15) こうした日本人の性格については幕末に日本にきていた外国人も気づいていたことである。例えば、オールコック、山口光朔訳：大君の都―幕末日本滞在記―岩波文庫：p.201 参照